

平成25年12月7日（土） 活動報告

気温：朝9℃ 天気：曇りのち晴れ 報告者：桑田直弥

<活動内容>

- 8：00 サポートセンター内掃除。
- 8：30 地元の野球クラブと協力して施設の廃品回収。
- 8：45 サポートセンターに来所した住民との対応。
- 10：00 D仮設団地へ訪問3件。血圧測定や健康確認等。
- 13：00 サポートセンター内にてエコクラフト教室に参加。
- 14：00 埼玉県の聖学院大学のボランティアグループと情報交換。
- 14：20 A仮設団地へ訪問13件。血圧測定や健康確認等。
- 15：00 サポートセンター内にてお茶っこクラブに参加。
- 15：30 E仮設団地へ訪問。血圧測定や健康確認等。
- 16：45 サポートセンターで訪問記録および個人記録作成。
- 17：30 退勤

○D仮設団地への訪問（10：00～）

…現地スタッフと相談し、派遣スタッフが単独でも訪問できる件数を多く設けて、見守る仮設住宅の件数を広げる事に。加えて、土日は平日に会社や学校で不在となっている30～40代の親世代や子どもへの訪問も大きな目的となる。実際、訪問して会えたケースでも平日にはお宅にいない家族やキーパーソン、東京から顔を見に来た甥などと会う事ができた。

(感想)

…訪問を繰り返す中で、私たち派遣スタッフの顔や名前を憶えてくれる住民の方が多くなってきた事を感じる。「昨日も来てくれたよね」「大阪から来た“巨人”の桑田真澄さん」など、好意的な受け入れ姿勢がありがたい。加えて、現地スタッフが一緒にいなくても、住宅の中に入れてもらえたり、お宅の中で話す事ができる時間量も増えてきた。

○サポートセンター内にてエコクラフト教室に参加（13：00～）

…サポートセンター内の場所を仮設団地の住民に無料提供する形で行う、自主サークルまたはクラブのような形。13時～15時までの時間内で好きな時に自由参加で7～8名の住民が参加。バッグやクリスマスツリーなど、思い思いの作品をお互いに教え合いながら作っていく。材料や道具も皆で持ち寄って作成。1つの編み込みバッグで1～2ヶ月ほどで作成できる、との事。女性が多いが男性の参加も見られた。

（感想）

…いわゆるデイサービスで行っているクラブ活動に近い雰囲気。だが、デイとは異なり、スタッフではなく住民が主導で活動の運営している。1つ1つ手作りで、住民同士が助け合いながら和気あいあいと取り組んでいる雰囲気に好感が持てた。作成中はとても真剣で集中されている。



図1：エコクラフト教室の雰囲気



図2：作成は細かく、とても真剣



図3：実際の作品例（フクロウ、クリスマスツリー、バッグ等）

○埼玉県の聖学院大学のボランティアグループと情報交換（14：00～）

…埼玉県より聖学院大学の人間福祉学科と心理学科の先生および大学生がサポートセンターを訪問。釜石市や大槌町の仮設団地へ手作りのブックマーク（本のしおり）を無料で配っているとの事。先生3～4名と大学生10名程のグループがバスで移動して回る。各仮設団地へ案内する。2年前の震災直後から継続し、1年に1回の頻度で、12月25日のクリスマスのお祝いの時期に合わせて、岩手県へ訪問しているとの事。滞在時間は短く、明日には埼玉県に戻る。人間福祉学科および心理学科の先生と岩手県の被災地支援のあり方や鶴住居地区の住民が抱えている精神的ケアのニーズ等について情報交換を行った。

（感想）

埼玉県より被災直後から支援を行っている大学を初めて知った。クリスマスのプレゼント風に仕上げられたしおりは大学生たちが手作りで1つ1つデザインを変えながら作ったとの事で、同じデザインが1つとしてなかった。聖学院大学の心理学科は児童心理が中心との事で、私が高齢者領域で臨床心理士として働いている事を説明すると、非常に驚かれた。大阪以外からの地域からも多角的な支援がある事は大変心強い。

余談だが、来年の1月末には北九州からモノマネのボランティアがサポートセンターに来所予定との事。



図4：聖学院大学の方々と一緒に



図5：配布している手作りのしおり

○サポートセンター内にてお茶っこクラブに参加（15：00～）

…D仮設団地より高齢女性が集まるお茶っこクラブに招待されて参加。いわゆるサロンの住民同士が情報交換や普段言えない愚痴を吐き出す場所として機能している。特に、復興の先行きの不安はどの方からも出ていた。釜石市役所は行政として住宅復興の説明会を今までも数回開催している、との事だが、住民にとっては説明会の開催で情報公開される意義よりも、現実の問題として住宅の再建や土地の再編成が現状にイライラが募る。

（感想）

12月1日に安倍首相が釜石市に訪問に来た事や、流行語大賞から東京五輪が決まった話題なども出た。しかし、「安倍首相は釜石駅周辺だけで、仮設まで来ない。所詮はアベノミクスのための票集め」「東京五輪そのものは喜ぶべき事だが、建設業者等が関東に流れてしまう。五輪というお祭りよりも先に、東北の復興が先ではないか」などの辛辣な意見も多々見られた。仮設団地でお住まいの住民の心境をイメージすれば、私が釜石に出張で来ているホテルに先の予定も立たずに、約3年間も閉じ込められてしまうようなもので、苛立ちや怒りは当然だと思う。むしろ、この状況の中で抑うつや無気力にならずに踏ん張っている住民が多い事に感動する。お茶っこクラブも愚痴を言い合いながらも、落ち込むのではなく、笑顔で大声で笑い飛ばすような明るい雰囲気が印象的であった。



図6：地元の方言で明るく語るお茶っこクラブの皆さんと

以上